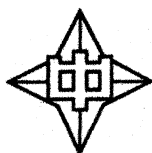


令和5年度さいたま市立与野南中学校 学校だより

みなみかぜ



南風

第7号

令和5年9月1日発行

<http://yonominami-j.saitama-city.ed.jp>

<学校教育目標> 進んで学ぶ生徒 心豊かな生徒 心身共に健康な生徒

暑さと本校の対応

校長 吉原 誠 士

秋が訪れているとは到底思えないような気象が続いていますが、朝夕のそよ風には驚かされる瞬間も訪れるようになりました。それでも学校にとっては日中の炎暑こそが気がかりで、洒落ている場合ではありません。報道を引用するまでもなく、熱中症の危険は依然として続き、油断は禁物です。5月末から徐々に気温が上がるのに合わせて警戒感も高めた1学期とは異なり、新学期には高温と知りながらも慣れからくる隙が生まれる怖れがあるのです。生徒の健康と安全を第一に考えなければならない私たち学校関係者は、熱中症への関心と対策を失う訳にはいきません。

私たちが感じる「暑さ」は、①気温 ②湿度 ③日照（太陽からの赤外線放射） ④風速 という自然現象と ⑤地表面や壁からの赤外線放射（鉄板焼きなどで感じる熱気） ⑥着衣の状態 ⑦運動の様子（代謝量）^{たいしや}によって決まるという考え方があります。学校では暑さ指数（WBGT）を測定する簡易な器械を多数常備していますが、上記の①～⑤を同時に測定して計算も行い、警告音を発するという優れたものです。本校ではそれぞれの活動場所で測定した「暑さ指数」や、環境省から発表される「熱中症警戒アラート」を参照しながら検討を加え、昼休みの外遊びも含めた運動の可否を判定しています。

暑さの考え方がわかれば根拠ある対応が可能になります。例えば、日陰に入るとか傘をさすとかするのは③への対処です。昨年度からのポロシャツ着用を可とした背景も②～⑥として説明が可能です。また、赤外線が光の一種であることから、日傘や帽子等も含め服装はすべての光を反射する白系統が有利なことも理解できます。「打ち水」は地面を冷やして⑤を減少させて涼感を得ようというものであることがわかっています。実は散水しても気温（①）への影響はほとんどなく、湿度（②）は急上昇します。昼間の散水は「蒸す」ようになるので、水を打つのは太陽が傾いた夕方だと心得るとよいでしょう。うまく微風が吹くと効果が上がります。アスファルトの路面を冷やすには大量の水を撒いても困難です。

今夏やり残した実験は「暑さ指数の継続観測とそれに基づいた校庭の危険度の解析」です。校地内の数か所（屋内を含む）の結果を比べて活動の参考にしようとの企画です。また、数校で同時に測定した結果を比較することも企てていました。市内で一律で決めている注意喚起の適否を調べたかったのです。問題を発見したり解決に燃えたりするのは私が教員（理科・気象学研究室出身）だからなのでしょう。上記の「打ち水」について先行研究がないことを知って測定用の機材を自作、観測結果をまとめて気象学会で発表したのは20年以上前のことです。あまり自慢話は好まないのでも「暑さに負けず、その中からでも課題を見つけよう」として本稿を締め括ります。未来の教育に絡めれば「探究的な学びに向けて子どもも大人も頑張ろう」となります。与野南中学校生徒、教員、保護者、まだまだやれますよ！

私がぼやいていたら保健室の佐々木先生が1日記録を試してくれました。昨日は校庭の最高気温は11時に38.6℃。暑さ指数は嚴重警戒が続きながらも風があるせいで警告音が鳴ることはなかったそうです。WBGT計だけに頼るのも考えものだとわかります。